
雷天風雲の章

『ラストクロニクル』ショートストーリー

作：嵐山 詩帆 監修：滝 舜一

街を見下ろすように空を翔る飛竜は、雷帝宮の周囲の市街地を破壊していく。翼が起こす風は平穩を吹き飛ばし、その口から吐かれる雷火は恨みの炎を燃やし、爪牙は静寂を引き裂いていく。

弓兵は風により矢の軌道を自在に操るが、その矢も暴風により阻まれる。たとえ届いたとしても、分厚いその鱗を貫くには至らず、致命傷を与えることはできずにいた。当たれば必殺であるミノタウロスの戦斧の一撃も、空の敵が相手、しかも狭い市街では思うように機能しない。

炎が燃え広がるように確実に被害が広がっていく中、その女性は現れた。腰まで届きそうな黒髪をなびかせ、表情は鍛えた鋼のように厳しいものだが、全体的に凛とした美しさを湛えていた。ここが狂飛竜との死闘の場でなければ口説く男の一人や二人は出てきたことだろう。

そう、ここはすでに戦場なのだ。ただ、彼女がまとう衣装には肌の露出が多く、とてもではないが戦いに赴くような身なりには見えない。だが、彼女が手に持つ巨大な魔魂石——嵐の力を秘めるユーカリスの嵌めこまれた杖が、辛うじて彼女

が魔の力を操る術師であることを表していた。

「ニコレアナ様！」

彼女が嵐の神・シグニイを祀る大精霊塔の上に姿を現すや、兵達の士気がにわかには上がり、顔には安堵の表情が浮かぶ。なぜなら兵たちは知っていたからだ……彼女の強さを。彼女こそはゼフィロンが秘蔵の切り札として育成を進めていた雷力師団、その団長を務める者だった。数々の伝説を持つ高名な魔術師・メイザーの最後の弟子にして、ゼフィロンと目される雷力術の使い手である。

「弓兵ら、あの狂った飛竜を私の元へ追い込みなさい。あとは私に任せるよう」
彼女——ニコレアナの指示に従い、兵たちは一斉に雨のような矢を飛竜に浴びせる。さすがにこれを嫌った飛竜は進路を変え、そうとは気づかぬうちに、巧みにニコレアナが立つ精霊塔の方へと追い込まれていった。飛竜の牙が目前に迫る中、彼女の精神は一切揺るがず、詠唱を続ける。そして、ついに詠唱は完成した。「ハッ!!」

気合とともに彼女が放ったのは、雷力の秘術・雷震波である。凄まじい光とと

もに空中を走った電撃は狂った飛竜を襲い、火花を散らして地へと叩き墜とす。飛竜の翼は破れ、今やその鱗は焼けただれて薄く煙を上げている。地に落ちた巨体に止めを刺そうと、衛兵たちが武器を手に駆け寄った瞬間……飛竜は最後の力を振り絞り、翼をためかして再び舞い上がった。周囲のどよめきの中、ニコレアナを噛み砕こうと大口を開き襲いかかる。

「っ……！」

不意を突かれたものの、ニコレアナは後ずさりながら詠唱を終え、自身の周りにいくつもの雷弾を発生させる。

「行けッ！」

そして彼女は飛竜の口に、周囲に浮かび上がった十数発の雷弾を全て叩き込んだ。いかに飛竜の鱗が堅かろうと、その喉の内部までは守れはしない。暴れ狂う無数の雷撃……サンダーバレットは内側から飛竜を焦がし、今度こそ完全にその命を焼き尽くした。

※※※

兵や民らが歓声を上げる中、ただひとり、ニコレアナだけは安堵や喜びとは無縁の表情を浮かべていた。

「はあ……」

雷帝宮の工房兼自室で、雷力師団長としての業務をこなす中、ニコレアナは小さくため息を吐き出した。その原因は先日の飛竜の一件だ。

（本当なら……最初の一撃で倒せなければいけないはずだった。私の雷震波には、まだまだ力が足りない……）

雷震波は彼女が習得している術の中でも、最大級の威力を誇るものだ。獰猛とはいえたかが狂飛竜一匹、一撃で絶命させられなかった事実には、彼女は自身の力不足を痛感していた。

「あの、団長……大丈夫ですか？」

そんなニコレアナに声を掛けたのは見習い雷力師のライカだった。彼女はまだ

未熟なため戦場に立つことはないが、ニコレアナのそばで雑事をこなしながら修行を続けている。体は小さいながらもなかなか気が利く少女で、何かと忙しいニコレアナにとっては、痒い所に手の届く存在だった。

「ええ、大丈夫。ちよつと考えごとをしていただけだから」

ニコレアナの憂い顔は、どうやらライカにまで心配をかけてしまうほどだったらしい。

(どうも気が緩んでいるようだわ。長の士気は組織全体に関わってくる)

そう思い、ニコレアナがそつと気を引き締めようとした瞬間、部屋にノックの音が響いた。

「はい」

主であるニコレアナに代わってライカが扉を開けた。そして……客人の姿を見るやいなや、その場で固まってしまふ。だが尋ねてきた人物はそんな彼女を気にする気配もなく、遠慮なく部屋に足を踏み入れると、ニコレアナに声をかけた。

「ニコ、ちよつと良いかしら？」

長い黒髪、凜々しくも美しい顔だち。少し厚い唇も、むしろ彼女を肉感的に見せていた。ひと目で高貴な身分だと分かる上品な衣装に加え、威圧感と同時にどこか優美さを感じさせる。それだけではない。よく見ると、その女性はニコレアナにどこか似た雰囲気を持つていた。

「……ゼイリア様、わざわざお越しとは、いったいどうされたのです？」

ニコレアナが渋面で言う、女性は微笑みを浮かべながら応じる。

「やれやれ、姉さんでは駄目なのかしら？ 宮中ではあるまいし、別にそんなに硬くならなくて良いわよ」

「……いいえ、お互いに立場というものがありませんから。それに、ここにはライカもおりますし」

「相変わらず、お堅いわね」

小さく肩をすくめて見せたその女性——ニコレアナの姉であるゼイリアは、二十代にして雷帝宮の執政官を務める女傑である。外交や政略に長け弁舌も巧み、そして何より雷力師としての実力も並外れたものがある。ある意味でニコレアナ

以上の才女でもあり、彼女は小さい頃から、この姉のことが誇りであるとともに、どこか引け目にも感じてきた。態度こそ軽めだが、とかく多忙な姉が政務中に自分を訪ねてくるなど、滅多にないことだ。何か重要な案件なのだろうか……それだけでも、ニコレアナが身構えるには十分な理由だった。

「先日、雷帝宮の周囲の市街を襲った飛竜についての報告は読ませてもらったわ。それで、一つ気になったことがあるの」

今までも精霊力の乱れにより、凶暴化して人々を襲った狂飛竜の報告はいくつかあった。だが、それがこの雷帝宮のすぐそばにまでやってきたのは、初めてのことだ。ゼフィロンだけでなくアトランティカ全土で何かが起きている……ニコレアナはてつきり、聡明な姉もそう考えてそのことを相談するため、ここを訪れたのではないか、とちらりと考えた。だが、続くゼイリアの次の一言は、その予想とは異なっていた。

「あの報告書……何か、足りなくはないかしら？」

「え？」

報告書、というのは、飛竜の襲撃があつた直後にまとめたあの書類のことだろうか。さすがのニコレアナも小首を傾げていると、ゼイリアがさらに続けた。

「具体的には、あの飛竜との戦闘以外の部分」よ。街の被害とその後の復興について、全然触れられていないわね」

この場でなければ、ニコレアナはあつと口元を押さえていただろう。己の腕前の未熟さと戦いの結末ばかりに気が向いていたがための、手ばかりである。

「すみません、すぐ調査いたします。なので、申し訳ありませんが、その点は後日改めて報告させていただければと……」

そんなニコレアナに、姉はぴしゃりと言い放つ。

「いいえ、それでは遅いわ。私は執政官として街の被害状況が知りたいのよ、今すぐに。だから当事者であるあなたが行って報告しなさい。それと、そのあなた。たしか……ライカだったかしら？」

「は、はい！ 雷力師見習いのライカと申します！」

執政官たるゼイリアに突如名を呼ばれたライカは、少し裏返った、素っ頓狂な

大声をあげた。

「あなたもニコに付いて、ともに街の調査を手伝ってくれないかしら。どうも私の妹は、最近少し気が抜けているようだから」

そう言いながら、彼女はわざとらしく皮肉めいた視線まで送ってくる。

「は、はい！」

まさか雷力師団の正式な団員でもない自分の名を、さきほどの一度の会話で覚えられるとは思わなかったのだろう。ライカの返事は固さを残しつつも、どこか嬉しそうですらあった。しかしニコレアナは、少し眉根を寄せて反駁した。

「お言葉ですが……ゼイリア様、私にはそんなことしている余裕などありません。ただでさえここ最近のゼイローンの状況は不安定なのです。新しい術式の開発、団員たちの訓練、私自身の鍛錬も……やるべきことは尽きませんし」

「余裕がなければ、余裕を作りなさい。それと……」

ゼイリアは懷中から一枚の紙片を取り出し、ニコレアナに突きつけた。そこには、ゼイローンの象徴たる雷龍を形どった雷帝宮のシンボルが大きく押印されて

いる。それはこの書類が、執政官たるゼイリアの手による正式な公文書である証だった。

「これは執政官命令よ。あなたには、この命令に従う義務があります」

(いくら姉さんとはいえ、ちよつと職権乱用じゃないかしら……)

一瞬眉をしかめ、唇をわずかに尖らせたニコレアナだったが、すぐにライカの前であることを思い出し、表情を引き締める。そして、できるだけ平静を装った口調で答えた。

「……了解いたしました、ゼイリア様」

「ふむ、分かればよろしい」

小さい頃からどうにも頭が上がりない彼女の姉は、打って変わって上機嫌な様子を見せ、にっこりと微笑んだ。

※※※

「ニコレアナ様が直々に来てくれるなんて俺嬉しいっす、これ、俺が作った麦パンです、是非食ってください！」

「いえ、今日は視察なので、街の状況さえ分かれば……」

「まあまあ、そんな格好で寒くないの？ おぼちゃんが上に羽織る物でも持ってきてあげようか？」

「これは雷力術をより使いこなすため、大気中の雷の精霊力の動きを察知するための薄着でして。せっかくですが」

「うっぷ！ア、アンタが街を救ってくれたっていう、ら、雷力師様かい？

へへえ、こんな色っぺえ姉ちゃんだったとは……！ なんにせよ、ありがてえありがてえ……！」

ひと睨みで雷力師たちを震え上がらせるニコレアナの威光も、気さくな庶民たちにはまったく通じないようだった。被害状況などの詳細を聞き集めるために訪れただけだというのに、ほとんど調査とは関係ない世間話や無意味なやりとりが何度も行われ、彼女も律儀にその話に付き合った結果、調査には予想以上に時間

がかかってしまった。全てが終わる頃には、昼をとうに過ぎてしまっており……住民たちの活気に気圧されてしまったニコレアナが、これなら師団の詰所か雷力工房にいたほうがマシだったかも、などとうんざりしていたところに、ライカが話しかけてくる。

「皆さん元気みたいですね！ これも、団長のご活躍のおかげですよね！」

ライカは小奇麗な字でまとめた報告を見返しつつ、目を輝かせながら言う。彼女なりに街の被害を心配していた裏返しか、その表情は満面の笑顔だった。ニコレアナはそんな彼女の様子を眺めながら、ふと心中で呟く。

（そうだ、街が破壊されても人々は元気に生きている……。被害箇所の復興も、順調に進んでいるようだし）

ゼフィロンの国土の多くは高山と荒野に覆われている。短い草に覆われた大平原はいくつかあるものの、土壌は決して豊かではなく、特に農耕という面においては恵まれているとは言えない。それでもこの国の民は、それなりに幸せに暮らしている。最近の雷帝宮の施策は、他国との争いに勝利するための国力を築く方

向へ傾いており、開発される技術も、攻撃や侵略に適したもののばかりである。だが、本来はどうなのだろうか？ そう、本当は国を守ることこそが、我々の使命なのではないだろうか……ニコレアナがぼんやりとそんなことを考えていると、不意にライカが声をあげた。

「あつ、あれは……？」

見ると、大通りの片隅に人だかりができています。大きな天幕の横木に掲げられた看板を見ると、銅板に木作りのコップの形が打ち出されていた。中の液体が泡立っているから、どうやらビールや火酒などを出す露天酒場であるらしい。だが、今はその天幕の周りに、多くの人々が集まっているようで、大混雑しているようだった。

「あんな人だかりができるなんて……何の騒ぎかしら？」

「私、気になります！ ニコレアナ様、覗いてみましょうよ！」

好奇の表情を顔いっぱいにつかべたライカにぐいぐいと腕を引っ張られ、ニコレアナは苦笑しながらその天幕の中に足を踏み入れる。

人の輪の中に、一際大きな木のテーブルと、丸木作りの椅子が二つ。さらにそこに、それぞれミノタウロス族と人間らしい二人の男が、向かい合って座っていた。テーブルの上にはすでにいくつもの空になった木のコップが乗せられている。どうやら、ゼフィロン名物の雷火酒の飲み比べをしているらしい。上半身はほぼ裸に近いミノタウロスの体がだいふ赤みを帯びていることから、すでに相当な量を飲み干しているようだ。一方の人間らしき男のほうは、フードを目深にかぶっており、その様子はいかがい知れなかった。

「わー……飲み比べですか！すごいですね！」

「とはいえ、真昼間からここまで酒を煽るのは、いかななものかしら……？」

「もう、ニコレアナ様は生真面目ですね！ 雷火酒の一、二杯くらい、私の地元では子供でも飲み干しますよ！」

肩をすくめたライカが、ふと気づいたように、そつと声をひそめて言った。

「それより、ニコレアナ様。そろそろ、勝負がつきそうですよ……？」

見ると、ミノタウロスのほうは、だいふコップを傾ける手つきが怪しくなっ

きていた。その皮膚の色も、すでに赤というより紫色に近くなってきている。その一方で人間の男のほうは、ぐいぐいとコップを空けていくその手つきに、ほとんど酔いの気配が感じられない。やがて、まもなく。

「ぐおおおお、もう飲めねえ……！ 負けだッ、負けッ！ まったく、あんたにやかなわねえよ！」

ミノタウロスが大きく息を吐き出すと、ほとんどテーブルの上に突っ伏すようにしながら、大声を上げた。一方、男のほうは、顎をなでながらひょうひょうと答える。

「なんだ、もう終わりかい？ いやゝ悪いね、それじゃあここは、あんたのおごりということぞ！」

そう言うはじから、男は運ばれてきたコップをぐいつと煽って、瞬く間にまた一つ空けてしまった。それを机の上に威勢良く置きながら、ひとりごちる。

「ふーむ、何だか暑くなってきたな……さすがに、ちよいと酔いが回ったか」

ふうっと大きく息を吐き出しながら、男はすつとフードを脱いで素顔を晒す。

その顔を見た時、ニコレアナの顔に驚きの表情が走った。彼女はやんやと喝采する群衆の間に割って入り、男のそばに歩み寄った。

「せ、先生！ メイザー先生！……こんな所で、いったい何をしてらっしゃるんですか!？」

「んんん……?」

声をかけられた男は目を細め、ニコレアナの顔をまじまじと見つめる。一拍置いて、彼はようやく反応を見せた。

「……おお！ 誰かと思えばニコじゃねえか。久しぶりだな、まだ魔法工廠に籠ってんのか？ ちったあ外に出るよ……ってああ、今ちようど出てんのか!」

酒が入っているせいか、自分で言った言葉に対して自分で突っ込みを入れて納得し、笑い声を上げる。典型的な酔っ払いの様相を呈していたが、目の奥にはどこか鋭い光をたたえているようでもある。

「先生が自ら庵を出て、雷帝宮の城下町にこられるなど……もしや、何かあったのですか!？」

「いや、別に何も無いさ……俺の用事は、こいつだよ。久しぶりに一杯やりたくなつてな」

そう言つてからジョッキを揺らしてみせ、残つた酒を一気に煽る。そうしておいてから、彼は椅子の上に立ち上がった。

「久々に弟子に会えた、今日は日が良い！俺と……そこで潰れてるミノタウロスの旦那のおごりだ！全員好きなだけ飲み食いしてくれ！」

大声でそう宣言した男に、万雷のような拍手喝采と賞賛の聲が飛ぶ。そんな中、ライカがようやくニコレアナの元へと駆け寄つてきた。

「だ、団長、置いていかないでくださいよお」

「ああすまない、どうしてもこのお方に用があつて……」

「？このオジさん、団長のお知り合いなんですか？」

ライカの小声の質問を、男は耳ざとく聞き取つたようだった。椅子の上から身軽にすくと飛び降り、大声で言い放つ。

「おいおい、初対面にしては随分失礼なお嬢ちゃんじゃねえか。いいか、俺は才

ジさんじゃねえ……メイザーって立派な名前があんのよ」

「メイザー……さん？ どこかで聞いたことが……あつ、雷力師の祖、伝説の大魔術師様と同じお名前ですね！」

あくあ、とニコレアナは眉根を寄せ、額に手を当てながらライカにそつと言った。

「ライカ、いい？ 信じられないかもしれないけど、この人がそのメイザー様本人なの」

「……へ？ ……ええええええええええつ？」

少し間を置いてから、ひっくり返らんばかりに驚くライカ。その様子にメイザーはにやりと笑って、わざとらしいキメ顔を作ってみせる。

（変わらないなあ……）

ため息をつきながら、ニコレアナはそう思う。あの頃のことを、ちよつぴり懐かしく記憶の中から拾い上げながら……。

※※※

「きゃああああつ!？」

ニコレアナの悲鳴とともに、パシツと火花が爆ぜたような音が飛ぶ。ゼイリアが妹を守るかのように前に出て、目の前の無礼な男をきつ、と睨みつけた。

「いててて……なるほど、こりゃあいい雷の魔法の資質を持ってやがるな」

二人の目の前で苦笑しながら、火花を伴うゼイリアの雷の小魔法に打たれ、赤くなった左手のひらを振っている男。彼こそが、かつてのメイザーその人……十年前、ニコレアナとゼイリアがまだ少女だった頃に、魔法の師として、父に招聘された頃の姿である。

だが、その人相や身にまとう雰囲気は、今と驚く程変わっていない。風雨の精霊力と一体化する術を極め、人ならざるほどの長命を誇る彼は、かつてですら、ゼフィロン屈指の大魔術師だった。もういい年のはずだが見た目は非常に若々しく、せいぜい30代半ばにしか見えない。だが当時、彼はすでに一線を退いており、

ゼフィロンの表舞台から姿を消してしまっていた。人の身でありながら精霊力そのものを体に宿すためには、魂が清浄でなければならず、俗世間からは身を引く必要があるというのが表向きの理由だったそう。そのため、世間では清廉潔白の賢人というイメージさえ流布していたくらいだったのだ。もちろんニコレアナも、実際に彼に出会うまでは、伝説の賢人という先入観を勝手に抱いていたのだが—— 事実はまったく異なっていた。なにしろ父の呼び出しに答えて現れたのは、父の肩を馴れ馴れしく叩きつつ抱擁し、挨拶がわりにまだ少女だったゼイリアやニコレアナの尻を撫で回すような、非常に俗っぽい中年男だったのだから。後で聞いたところによると、彼がニコレアナやゼイリアに雷力術の手ほどきを行ったのは、かつて戦場で肩を並べて戦った彼女たち姉妹の父に頼まれての、やむを得ない事情であつたらしい。

ニコレアナとゼイリアはその後、彼について魔法の勉強をすることになった。メイザーも認めるほどの資質を持ったゼイリアは、皮肉なことにもまもなく魔術師よりも政界を志して彼の元を「卒業」したが、ニコレアナは彼の指導で、かなり

のところまで熟達することができた……。親友の娘だからと手心を加えることをしない（とはいえ、あれでも多少は気を使っていたのだ、とは本人の弁だが）メイザーは、常にニコレアナに最上の成長と結果を求めた。

辛いこともあったが、あの頃の修行の一つ一つが、雷力師団長たる現在の礎を作ったのだとニコレアナは考えている。そんな彼女にとって、メイザーはまさに偉大なる師匠そのものなのだ――

※※※

しばらく後、ニコレアナとライカ、それにメイザーは、騒々しい大衆酒場から場を移し、少し落ちついた店のカウンターに腰を据えていた。

「先生は今、どのようにお過ごしですか？ たしか、北方の剣山の麓に庵を建てて籠もっていると聞いていたのですが」

「まあな。たださつきはああ言ったが、ここんところ、月にいっぺんは街に来る

ことにしているんだ。先日も不審な風を感じてやってきたら、案の定だ。とはいえお前がいたから、あの狂飛竜との戦いに、俺の出る幕はなかったがね」

「え！ 先生、あの時、街にいらつしやっただんですか？」

驚いたことに先日の襲撃の時、すでにメイザーは雷帝宮のあるこの街にいたらしい。

「まあな……ついでに街に逗留して、いろいろと情報を集めていた。最近、どうもゼフィロン全体の風向きが妙でな……ニコ、お前も感じるだろう？」

「……はい。あちらこちらに、不意に狂飛竜の群れが現れることが増えました。ついにはこの雷帝宮がある王都まで。何となくですが、良くない風が吹いている……そんな予感があります」

「そうだ、さすがに俺の弟子だけのことはある」

メイザーが得意げに顎をなでる。

「それにしても……お前がこんな昼間っから街をぶらついているなんて珍しいな。風来坊の俺なら、そう不思議でもねえが」

「姉さんの命令ですよ。本当は部下たちの訓練や新たな術の開発で、こんなことをする暇なんてないのですが……」

「……ゼイリアが？」

ちよつと不服そうに言ったニコレアナの言葉に、メイザーはふと引つ掛かりを覚えたようだった。

「ふうむ……なるほどな」

「？」

ちらりと思案顔になるメイザー。

「ゼイリアのやつは、最近ゼフィロンの国力を高めることに妙に躍起になっているようだな。嵐の精霊力を持つユーカリスだけでなく、多彩な魔魂石をしきりに確保していると聞くが……」

「そうです。たまに会うと思いつめていて、何かに焦っているようにも思える時があつて……」

「政略や武力を背景に、他国の魔魂石の産地を抑えにかかっているという話もある」

るようだが……？」

「はい……姉さんは最近少し、人が変わってしまったような気がしなくもありません」

「ふむ」

昔はもつと優しくて穏やかで……という言葉を、ニコレアナははつとして飲み込んだ。こういった政治的な話題には疎いレイカが、きよろきよろと二人の顔を交互にうかがいながら聞いていたからだ。雷力師団を率いている手前、部下に不安を覚えさせるような言動は慎むべきだった。

「それはそうとして、先生」

話題を切り替えるべく、ニコレアナは新たな方向に水を向ける。

「なんだ？」

「先生は、先日の私の戦いを見ていたのですよね？ ……それなら、お気づきになったことがあるかと思えます」

「……」

メイザーはその顔に漂っていたひょうひょうとした気配をすつと振り捨てると、鋭い眼光でニコレアナを見つめた。ニコレアナも決意を込めて、その視線を受け止める。

「実は、先生に頼みたいことがあるんです……お願いです、どうか、どうか私に雷震波の極意を教えてください！」

「雷震波の極意……だと？」

「はい。先生もお気づきだったかと思えます。あの飛竜との戦い、私は即座に終わらせることができませんでした……一撃で全戦闘力を奪えなければ、被害を最少限で食い止めることはできません。私は強くなりたいのです、このゼフィロンを守りぬくために」

だが、師の返答はにべもないものだった。

「ダメだな、あれは俺が自分の精霊力の在り方に沿って組み上げた術式だ。俺以外に使いこなせる奴がいるとは思えん。お前は雷震波の性質を熟知しているはずだろう？ 雷力師が自ずから秘めている雷の精霊力の波動……それは一人一人異

なっているものだ。だから、俺の雷震波は俺にしか使えない。お前が知らないはずはないと思つたが」

「それはそうです……ですが、先生の術は、歴代の使い手でも随一の破壊力だと聞きました。だからこそ、その極意の手がかりだけでも……」

「いいや、無理な相談だな。それにあんな古臭い術に頼ろうつてのもどうかと思うぞ。俺はもう、今の時代の人間じゃねえ。隠遁生活をしているのも、それを悟つたからだ……風が澱（よど）めば、国は衰退する。ゼフィロンの未来は、新しい風が導いていかなくちやな。それにお前も雷力師の端くれなら、己の力で自分だけの道を切り開き、極めていく必要があるはずだ。だから雷震波の極意は教えられねえ。自力で、新しい術を作り出せ」

「ですが……ですが今は、あの力が必要なんです……!!」

そつと唇を噛むニコレアナ。予想された答えではあつた。こう見えてもその道の探求にかけては、人一倍厳しい師である。

「お前の研究熱心さなら、いくらでも可能性はある。それに従来の雷力術だって、

威力は捨てたもんじゃねえ。いざとなりやあ、このゼフィロンにはバルヌーイやイエルズ、その他にも無数の勇者たちがいるだろう」

雷龍族の長でもあり、このゼフィロンの守護神ともいえる雷帝バルヌーイ……古強者であるメイザーはこれまで、幾度かのゼフィロンの危機に立ち会ったことがあった。だがそのたびに、あの雄々しい勇姿が敵を打ち砕き、国難を払ってきただ。また最近名を上げているイエルズという竜騎士が、かつてないほどの勇者だということは、普段隠遁生活をしている彼ですら聞き及んでいた。そのほかにも、ベル一族やモル一族などを中心としたミノタウロスの猛者たち、勇将フルーシュトに率いられた騎兵部隊、スワントの弓兵たちなど、ゼフィロンには決して人がいないわけではない。

「しかし、それではバルヌーイ様や、従来の英雄たちの力に頼りつきりなのと同じです。何のために新たな力として、我々雷力師団が組織されたのか……お願いです！ どうしても私はさらなる強さを身につけたいのです！」

懇願するニコレアナを、メイザーはじっと見つめる。

「……ふん。やつぱりダメだ。それじゃあ一生かかっても、お前には本物の雷震波を使いこなせねえよ」

「なぜですか!? どんな辛い修行にも耐える覚悟はできているつもりです!」

真摯な瞳で、見つめ返してくるニコレアナ。メイザーはやれやれ、と頭を掻いた。今言った言葉には理由がある。ニコレアナは、そう……真っ直ぐすぎるのだ。愚直なまでにひたむきで、こんな機会がなければ、街に繰り出すことさえしないのだろう。毎日新たな力の研究に明け暮れ、ゼフィロンの未来のことだけで頭をいっぱいにして、日々を憂いつつ過ごしている。

（かつて、お前みたいな女がいた……頭は切れるくせに真っ直ぐすぎて、身の程を考えないバカが。俺はもう、あんな奴に引つ張りまわされたり面倒を見るのはゴメンなんだよ……）

メイザーは少し目を細めて、そんなことを思う。ふと気づき、柄にもないことを、と自嘲の笑いを浮かべた直後。

「ニコ、分かったよ。そうまで言うなら、雷震波の極意を教えてもいい」

「本当ですか!？」

思いがけない言葉に、ニコレアナの瞳が輝く。

「ああ。だがその前に、授業料をいただきたいね」

「えっ!？」

「なあに、安いもんだよ。代償として、ちよいとその胸を揉ませ……ぐふっ!」
「だらしな顔つきと卑猥な手つきで、わざとらしくニコレアナに迫った彼の頭を、何かが強打した。」

「ラ、ライカ、いったい何を!？」

「団長、この人危険です!」

メイザーとニコレアナの間に割って入ったライカが、酒場の銀色のお盆を持って彼を睨みつけていた。まるでニコレアナを守るうとするかのようにでもある。

「つつくくくッ! このチビ、このメイザー様の頭をどつくなんざ、いい度胸だな!」

「うっさい! エロじじい! 変態魔術師! スケベ雷力使い!」

「なんだと〜!? しかもてめえ、今、その盆の面じゃなくてカドで殴つたら？この俺が衝撃で大呪文や秘術を忘れたりしたら、ゼフィロンの国家全体の損失だぞ!」

メイザーはライカを捕まえようとするが、小猿のようにすばしっこい彼女はなかなか捕まらない。品格ある店の主人が眉をひそめるのに必死で謝りながら、ニコレアナはふと、胸の内にわだかまっていたもやもやがすつと晴れていくのに気づく。そう、ニコレアナは自分でも気付かないうちに声を抑えきれず、笑っていたのだった……それは自分でも、ずいぶん久しぶりのことに思えた。

※※※

メイザーとの思わぬ再会から数日が過ぎた。今、ニコレアナは再び雷帝宮の外れの魔法工廠に籠もり、自分の研究に没頭していた。机には古今の書籍が山と積み、いくつもの術式の書かれた羊皮紙がそこかしこに散乱している。だが、ニ

コレアナ自身の雷震波はまだ完成していなかった。問題となっているのは先日から変わらず、威力の弱さについてだった。術自体に問題はないはずだが、どうしても伝承に伝わっているような強大な力を引き出すことができない。自身の力不足を実感しつつ、憂いの表情を浮かべるニコレアナ。そんな彼女の脳裏を、メイザーに言われた言葉が掠める。

『それじゃあ一生かかっても、お前には本物の雷震波を使いこなせねえよ』

(いったい私に、何が足りないのか……だめだ、分らない……)

まるで、手がかりのない深い闇の中にいるようだった。焦りの気持ちが彼女の内側で膨れ上がり、さらに焦燥を深めていく悪循環……今、ニコレアナはまさにその陥穽に落ち込もうとしていた。そのとき。

「だ、団長！」

ノックもせずに扉を勢いよく開け放ち、飛び込んできたのはライカだった。

「どうしたの？ そんなに急いで」

「……今、スワントの斥候から伝言が！ バストリアに突如、巨大な怪物が出現

したとのことぞ！」

「えっ……!？」

「バストリアは大混乱に陥っている模様です！ その化物は形が不定形で、まるで黒雲の塊のような姿だとか。そいつが吹き出す死の瘴気で、バストリア軍は壊滅状態だそうです……！」

「……ライカ、詳しく教えなさい！」

——その日が、アトランティカと忌まわしき災害獣たちの初めての邂逅となった。そしてその年、ニコレアナが最後に熟睡できた夜にも……。

※※※

風が暴れている。窓の外はひどい嵐だった。激しい風が雨と一緒に魔法工場の窓ガラスを叩き、雷帝宮の外れにあるこの尖塔自体が揺れているような錯覚さえ感じさせる。いや……揺れているのは、ニコレアナの心だったかもしれない

い。

「もう一度、聞かせて……？」

おそらくその報告に耳を疑ったのは、ニコレアナだけではなかったはずだ。ゼフィロンについて現れた嵐の災害獣、オグ・シグニス。「シグニイの敵対者」の意味を持つその邪悪な存在は、彼と対峙した雷帝……ゼフィロンの誇り、偉大なる雷龍の長バルヌーイを打ち倒し、手ひどい負傷を負わせたというのだ。さすがにオグ・シグニスの方も無傷とはいかなかったようだが、バルヌーイはもはや前線に立つことは叶わない状態となってしまうと、ライカが意気消沈した声で告げてきたのだ。バルヌーイとゼフィロンの飛雷隊はその快速を利用して、雷力師団より一足早く、オグ・シグニスたちの軍勢に立ち合うことになった。それは確かな事実だ。しかし、あのバルヌーイが……破れたというのか？

「……報告者は、誰？」

「伝令によると、元の情報はアズラール様からとのことです」

アズラール——金さえ払えばどんな仕事でも請け負う、ハシシユ族の女暗殺者

にして隠密である。ニコレアナにとって正直好きになれない人種だが、その情報収集力が本物であることは疑いない。それゆえに絶望は深かった。

「分かったわ……」

より詳細な報告書を受け取り、部屋を出ようとするニコレアナに、ライカが不安そうに呼びかけてくる。

「あの、団長……」

「ごめんなさい、少し一人になりたいの」

そう言つて、彼女は部屋を後にした。

……重い足取りで辿り着いたのは雷帝宮の屋上である。ニコレアナは手すりにもたれ、見慣れた街を見下ろしながら、今しがた読み終えた報告の内容を思い返していた。オグ・シグニスとバルヌーイとの交戦で確かに傷ついているようだ。彼の武器たる大剣は破壊され、その眷属たちや瘴気に狂った飛竜たちも、多くがバルヌーイの雷撃により焼き尽くされたという。だが……オグ・シグニスにはどこか、得体の知れない力が隠されているようであった。手傷を受けたのは確実

なのだが、結果的に彼が身にまとう嵐の勢いは弱まるどころか、さらに増しているという。

(あと、どれくらい時間が残されているかしら……)

ニコレアナの頭の中で、オグ・シグニスがバルヌーイと戦ったという平原からこの雷帝宮までの距離が正確に算出され、猶予時間を割り出す。同じく報告書にあったオグ・シグニスの眷属たちの行軍速度から、各地での抵抗による遅れを考慮しても、おそらくひと月というところではないだろうか。彼らがこの雷帝宮に到達したとき……ニコレアナの頭脳は、最悪の結末を導き出した。ゼフィロンは壊滅する。政治の中心であるこの都市が蹂躪されるということは、そのままこの国の死を意味するのだ。

(このままではゼフィロンがなくなってしまう。私の愛する人たちが住むこの国が……)

本当に、手立てはないのだろうか？ 不安を振り払うべく、ニコレアナはいくつもの戦術や戦略について思い巡らせたが、その全てがオグ・シグニスの前では

一瞬で無へと還されるような気がした。バストリアは王都こそ破壊されたものの、黒衣に身を包んだ謎の騎士が現れ、あの黒い災害獣……疫魔の獣、イルルガンダエに対抗しているという。ガイラントでは、ドルイドたちが神山に伝わる秘術を使つて、猛り地の獣ガムラドウの力を削ぐことに成功したらしい。そして、イスラとグランドールは共に手を携え、国難に立ち向かっているという。しかし、このゼフィロンは？ この国の柱となるのは自主独立を重んじる誇り高き風の民であり、国土の貧しさと戦いを愛するがゆえに、その領民たちの一部はともすればイスラの領海を侵犯し、グランドールの辺境の村々を掠め取ってきた。彼らが今さら、援軍を送ってくれるわけもない。

（ゼフィロンには、私には……もう打つ手は残されていない……？）

そんな弱気な考えがふと頭に浮かぶ。最後の手段は一つ……全てを捨てて逃げ出すこと。そう、あと一ヶ月もすれば、ゼフィロンの長き歴史は終わるのかもしれなかった。

（何が雷力師団長だ！ 何がゼフィロンの雷力師だ……！）

いつの間にか、彼女は唇を固く噛み締め、その肩はわずかに震え始めていた。そのときだ。ふと、誰かの手が肩に置かれるのを感じた。ニコレアナが振り返ると、そこには……整った顔にこやかな笑みをたたえた、長身の美女の姿がある。

「姉さん……」

それは、雷帝宮の執政官たるゼイリアその人であった。

「やっぱりここに來ていたのね。あなたは普段から、ここが好きだったから」

そう言いながら、彼女はニコレアナの横に並んで腰を下ろす。

「それにしても……ニコ？ 団長がそんな風じゃ、団員たちの士気に関わるわよ。意外にだらしないのね」

その声は決して叱咤激励するようなものでなく、あくまで優しくかった。

「で、でも……私には」

「自信が……なくなつた？」

そつと、しかしぴしゃりと言い放たれて、ニコレアナはうつむいてしまう。

「やれやれ、ね。あなたは、自分で自分を追い込んでしまう……小さい頃からいつもそう。先日も、私が街を視察してこいと言った意味、あなたには分からなかったのかしら？」

「え……？」

「何かを成し遂げるためには、時として気晴らしだつて必要なの。偶然の出会いが、新しい風を連れてくることだつてある……。そう、確かにバルヌーイ様の戦力を失ったのは大きい。でもね、まだ希望は残されているわ」

「その通りだぜ！」

ふと、ゼイリアの後ろから声。

「メイザー先生……!? また旅に出ているのでは……？」

「ああ、そうだ。ちよいと昔の知り合いのところにな。もちろん、今はこんな時期だ。次の戦いには、俺も手を貸してやる」

「先生……」

「なあに、引退したとはいえ雷震波の十発や二十発、俺くらいの天才になると苦

もなく撃ち出せる。いくらオグ・シグニスをやつがタフだとはいえ限度つてもものがあるだろう？ あとな……俺はこんなときに、無駄にぶらついているほど阿呆でもない」

「？」

「つまるところ、相談ついでに助っ人も連れてきたってわけだ……おい、アイスラ」

声をかけられて、すつとメイザーの横に立った小柄な影がある。見るとそれは、ほっそりした体つきの少女だった。

「この子は……？」

年のころは10代後半というところだろうか。ニコレアナに向けてこくり、と一つうなづいたものの、それ以上少女は反応を見せず、押し黙ったままだ。薄い蜂蜜色の髪に透き通るような碧眼……美しい顔立ちだが、どこか冷たく神秘的な雰囲気身をまとっている。成長しきっていない手足がまだあどけなさを残しており、まるでグランドールの陶器人形のようなだ。

「俺の古い知り合い……レイスラって食べないババアの一番弟子さ。俺と同じで風の精霊力を身体に取り込んで、まだピンピンしてやがるんだが……そいつのところから、秘蔵っ子を借りてきたってわけだ」

メイザーは苦笑しながら、その少女に声をかける。

「おい、アイスラ。こちらはゼフィロンの雷力師団を束ねるニコレアナ様だぞ。執政官のゼイリア様までいらっしやるんだ、挨拶ぐらいしろよ」

仕方なく、といった雰囲気少女はニコレアナに視線を向ける。

「……初めまして。わたくしの師たるレンスラの命で馳せ参りました……アイスラと申します」

ガラスの器が鳴り響くような、透明な声。だが、その声は冷たく澄んでおり、少女らしいはにかみや愛嬌めいたものが、微塵も感じられない。

「……とまあ、こういうやつなんだ。無愛想だが、腕は確かだ。オグ・シグニスとの戦いではきつと力を振るってくれるはずだ。雷力師同士、仲良くない」

「この子も、雷力師……なのですか？」

「ああ、流派は違うが、一応な。そもそもレンスラと俺は、同じ嵐の大魔術師の元で修行した仲でね……」

メイザーの話では、「生まれついで天才」たる彼自身はいち早く極意を学び取ると、早々に師の元から独立して新しい看板を掲げた。それが現在の「雷力術と雷力師」の基礎になっているのだが、同門の者がおり、彼女も遅まきながら後に別の流派を開いたらしい。

「知らなかったです、雷力師に私も知らない別の一派があつたなんて……」

「ああ、レンスラのやつは欲のない女で、ゼフィロンの政情が安定してからはあまり人前に出ないようになつちまつたからな……。クソ真面目で愛嬌は欠片もないが、若い頃はなかなかの美人だったんだぜ？ とはいえ、その弟子が、こいつ」つてのも、推して知るべしだが」

メイザーは笑いながら、傍らのアイスラのほうに視線を戻す。彼女はニコレアナはもちろん、メイザーやゼイリアにも無関心そうで、つまらなさそうに灰色の空を見ていた。何を考えているのか、測りかねるところがある少女だ。そう……

昔、姉妹で飼っていた金毛の精霊猫に似ている。なんとなく、ニコレアナはそう思った。

「ところで、ニコ」

さつきまで微笑を浮かべながら一連のやりとりを聞いていたゼイリアが、ニコレアナに話しかけてくる。

「バルヌーイ様を打ち倒すほどの嵐の災害獣の力……どうやって立ち向かうべきか、悩んでいたのでしょうか？ レンスラ師の力も借りて、見通しはついたわ。さつき、魔法工廠一の技師の元から届いたの。これを見て」

「これは……？」

ニコレアナは、ゼイリアが胸元から取り出した紙片を受け取り、視線を走らせた。その目が、驚きに大きく見開かれていく。

「そう、新しい魔導器……サンダー・ブースターの完全な設計図よ。試作品はもう出来上がっていたけれど、最後のパーツの調整が難しくくてね……でもレンスラ師だけが持つ、独自の雷力技術が役に立ったわ。これを用いれば、使用者の雷力

は何倍にも増大する。それに、こちらは間に合うかどうかは分からないけれど、雷力を使った砲弾を打ち出す魔導砲の開発も進みつつあるの」

だから分かるわね、とゼイリアは微笑みかける。姉の意を汲み取り、ニコレアナも大きくうなづいた。

「あなたは一人ではない。それを忘れないで。今は、ゼフィロンの力が本当の意味で集結して、かつてない災いに立ち向かうとしているのよ。そして、私はあなたが努力家であることを知っている……あなたの姉ですもの」

そして、ふわりとした感触。ニコレアナの身体を、ゼイリアが優しく抱き抱えたのだ。ニコレアナの心に、そつと火が点つたようだった。本当に久しぶりの暖かい温もりを感じて、彼女は静かに目を閉じる。

「……猶予は短いけれど、あきらめずに困難に立ち向かって。そうすれば、あなただけの秘術……あなただけの雷震波も、きつと完成させることができるはず。私はそう、信じているのだから」

「姉さん……」

アイストラは、今は小首をかしげて、二人の様子をじっと見つめていた。メイザーもにやにやしなからそんな姉妹の姿を見守っていたが、ふと、何かの気配に気づいたようだった。

「……おい、お嬢ちゃん！ 隠れてないで、出てこいよ！」

そう言いながら、ずかずかと屋上への入口に近づいていく。

「や、止めて下さい！」

メイザーによつて扉の陰から無理矢理引っ張り出されたのは……雷力師見習いのライカだった。

「ほらほら、とつとと行ってこい」

まるで犬の子でも放るように、ぐいっとニコレアナの元に押し出され、ライカはたたらを踏みながら彼女の元に駆け寄る。その後、メイザーに大きく舌を出して返した後、彼女はニコレアナを見上げながら言った。

「あ、あの……団長、どうか元気を出してください！ 私、とっておきのものを持ってきたんです！」

差し出されたのは……緑色に泡立つ飲料が注がれた、銀色のカップである。

「私の生まれ故郷に伝わる薬草酒です！ これを飲めば、とつても元氣が出るんですから！」

ニコレアナは礼を言い、それをそつと口に入れた。さすがに少し冷えてはいたものの、その刺激的な舌触りと滋味が、まるで身体に染み渡っていくように感じられる……。

（私はこのゼフィロンを一人で背負おうとしていた……そうだ、そもそもそれが無理な相談だったのね。そんなこと、私にはできない……そう、私個人の力には限界がある。だからこそ、信じるのは自分の力だけでなく……）

「ライカ、ありがとう。元氣が出たわ」

「いいえ、団長の力になれたのなら、何よりです！」

嬉しそうに答えてから、今さらのようにライカは、ゼイリアとメイザーの傍らに佇む少女の姿に気づいたようだった。

「あ……あれ？ この子は……？」

「おう、俺の連れてきた助っ人でな、アイスラつていうんだ。年は嬢ちゃんと同じくらいだから、仲良くしてやってくれ」

「あ、なるほど……初めまして、私、ニコレアナ様の助手のライカです！ よろしくね！」

だが、アイスラはライカの挨拶に応じず、ついつと顔を背けてしまった。

「？ あのー、私、ライカつて言いまして……もしもし!？」

「……あなた、うるさいわ。犬みたいにキャンキャン吠えないで……聞こえてるから」

「……ッ!!」

大人ならともかく、同じくらいの年頃の少女に馬鹿にされたとあつては我慢できないのだろう。ライカの顔がたちまち真っ赤になるのを、まあまあとなだめながら、ニコレアナは再び、自分が笑っているのを自覚する。胸に黒雲のようにわだかまっていたもの……絶望は、すでにどこかに吹き散らされてしまっていた。

（そうだ、私は負けない。今、ここには確かな絆の力があるのだから……それを

守り、つないでいくためにも、私は立ち向かわなければ……!)

決意を込めて、見上げた空。ふと、灰色の雲間に閃光が走る。雲の上で起きた雷による発光であろうか。それは一瞬、絡み合つて空中に複雑な模様を描いたように見えた。次の瞬間、ニコレアナの脳裏に閃きが走る。

(そうだ、サンダー・ブースターのある回路図……あれを調整すれば……!)

見る見る、ニコレアナの顔が晴れやかになっていく。彼女は勢いよく、傍らのメイザーのほうを振り向いた。

「先生！ 私は分かりました……分かったんです！ 新しい雷震波のあるべき姿が……!」

※※※

暴風を纏い、それは現れた。風の精霊力を汚し、世界を吹き散らし破壊するだけの存在……壊嵐の獣、オグ・シグニス。ゼフィロンの王都を目指し侵攻してく

る短い間に増えたのか、周りにはその眷属たる異形のグリフォンや、瘴気によって理性を奪われ、その支配下となった狂飛竜の群れの姿が見えた。対して、それを迎え撃つはゼフィロンの全勢力。雷力師団をはじめとする人間だけではない。ミノタウロス、スワント、ケンタウロス、雷龍たち……今、まさにこの決戦の場に、文字通りゼフィロンの全ての力が集まっていた。場所は奇しくも、ゼフィロンの聖地・ウルスハの突風平原である。そして、その最前線には――

「つたく、老体をこんなところに配置して露払いを任せるとはな……ちつとばかり、師に対する敬意つてもんが足りないんじゃないかねえか？」

地面に胡坐をかいて座り、呑気な愚痴をこぼすメイザー。そんな彼を、周囲の兵士たちは胡散臭げに見守っている。本当にこれが、雷力術の開祖とされるあの伝説の魔術師なのか……？ どの顔にもそう、明確に書いてあった。そんなとき……敵の斥候でもあろうか、オグ・シグニスの群れからはぐれたグリフォンが一匹、鳴き声を上げながら上空に現れた。

他の兵が身構え、迎撃体制に移る中、メイザーは欠片ほどもその姿勢を崩そう

とはしない。

「そう焦るなよ、今日は愛弟子の晴れ舞台なんだ」

少し肩をすくめ、メイザーがその手にした杖を面倒くさげに掲げる。そしてその先で、上空のグリフォンをすつと指し示す。その途端、兵士たちの間にどよめきが走った。雷音一声、薄暗い雲間からたちまち巨大な雷の槍が飛来し、グリフォンを貫いたのだ。一瞬の光が周囲を紫に染め上げ、少し遅れて耳が張り裂けんばかりの轟音が空気を震わせる。直後、断末魔を上げる暇すらなく、黒焦げの命持たぬ肉塊となって魔獣は地上へと落下する。周囲の者たちが目を見張ったり喝采を送る中、メイザーは朝飯前といった風情で、地面に座り直す。そして彼は後方の本陣を見やって、小さく呟いた。

「ニコ、ゼイリア、見せてもらうぜ……お前たちの力を！」

その頃。突風平原に急遽構築されたゼフィロンの小城砦では、兵士たちを前に、決戦前の最後の激励が投げかけられていた。

「バルヌーイ様が不在になろうとも、この戦場には我が師・メイザー様をはじめ、

数々の武勇を持つ者がいる。我々は雷と風の下に集いし戦士だ、何も怖れることなどない！」

全軍を鼓舞する言葉を叫ぶは、雷帝宮の政務官ゼイリア。本来はニコレアナが軍務の要なのだが、今回の戦いでは、軍の指揮は自ら出陣したゼイリアに任されているのだ。

「ニコ、最後の言葉はあなたが自分で言いなさい」

ゼイリアに背中を押され、ニコレアナは一步、前に踏み出す。

「私はこの国を、ゼフィロンを愛しています。この国に在る全ての命を……私はこの国を護りたい！ だから私にあなた方の力を貸してください……オグ・シグニスを打ち倒すために！ これは雷力師団長としてではなく、ゼフィロンに住む一人の民としての言葉です……！」

一拍あって、整列した兵士たちが片手を突き上げ、歓声で応える。その興奮と満ち溢れる勇気は隣の者に伝わり、そしてさらにその隣へ……揺るがぬ意志と勇気の波は、どんどんと広がっていく。それを見ながら、ニコレアナは改めて心に

誓う。

（そう、私たちには魂が……意志がある……！ 誰しもが持っている勇氣と精神の波長……これを合わせることでできれば、きっと……！）

本陣から伝わってくる大歓声は、前線のメイザーのところにも届いた。彼はにやりとして、ゆっくりと立ち上がる。

「さて……いよいよ始まりそうだな。アイスラ！」

彼が声をかけると、傍らの少女が小さくうなづく。彼女は先日と違って、まるで傘のように見える不思議な装備を身につけていた。それは受けた衝撃を雷力に変換して撃ち放つ、彼女専用の武器である。防御と攻撃を兼ね備えたそれは、通称を秘雷傘（ひらいさん）という。整ってはいるが普段は無表情なその顔に、今日はかすかな興奮と緊張の色があるようにも思える。

「よし、お前も気合は十分なようだな……！」

メイザーはそう言って笑うと、不敵に前方を睨みつける。そのやや中空には、まるで黒い霞のように集まった、オグ・シグニスの軍勢の姿がある。

「さあ来いよ……俺のいかづちは痺れるぜ！」

……竜騎士たちがランスを構えて牙をむく飛竜の群れに突っ込み、それを援護するようにスワントの射手の矢が、雨のように降り注ぐ。ケンタウロスの騎兵が、地上に降りてきた狂った雷火獣の群れを追い込み、ミノタウロスが振るう戦斧の一撃が、壊嵐の眷属どもの首を打ち落としていく。雷力師団も負けてはいない。巨大な飛刃使いが雷力を込めてそれを投擲し、雷力の尖兵が魔術師団の雷縛術師たちと一緒に、いかづちの鞭を振るう。有能な隊長に率いられた雷力剣士たちのサンダーソードは、ひと振りごとに激しい雷火と死を敵中に撒き散らす。

だが、そんなゼフィロンの戦士たちの奮戦をあざ笑うかのような風が、戦場を駆け抜ける。オグ・シグニス……彼が巻き起こす瘴気混じりの黒い暴風は、敵も味方も区別なく、無数の命をその破壊力の渦の中に巻き込んでいく。雷力師団の分隊のいくつかがあつという間に壊滅に追いやられ、新たな犠牲者を求め、巨大な死の影は空中を疾駆する。

「……まだまだ！これくらいでは終わらんぜ……！」

メイザーはそんな地獄のような光景の中、奮闘を続けていた。傍らではアイスラガ、秘雷傘による雷力の盾を張り巡らせて彼や味方の兵士たちを護る。その陰から、メイザーは休む暇もなく雷力の飛矢や雷の槍を飛ばし、壊嵐の軍勢の侵攻を阻んでいた。常人ならとうに力尽きているであろう戦い方だったが、そこは生ける伝説である。とはいえ、その力もさすがに無尽蔵ではない。

(ちっ！ まったく、マジで寿命が縮むぜ……)

膨大とはいえ、彼が長年に渡り溜め込んできた精霊力を放出しているのだ。いつかは、必ず終わりがくる。

(まだか……!?! 早くしろ、そう長くはもたねえぞ、ニコ……!! ゼイリア……!)

メイザーはさすがにかなりの疲労と焦りが滲む顔で、ちらりと後方の小城砦に視線を送った。

※※※

ニコレアナは今、小城砦の小部屋の中に立っていた。彼女の足元には、複雑な図形を描く魔法陣が張り巡らされている。そのただ中で、彼女はこれから行われる雷力の大秘術のため、意識を集中していた。周囲には名うての雷力師たちが集い、さらに彼・彼女らと同数のサンダー・ブースターが配置されている。雷震波は、魂に秘めた雷の精霊力の波長を高めて放出するもの。ならば、それを複数ぶん寄せ集め、サンダー・ブースターの機能で波長を同調させて撃ち出すことができれば……というのが、ニコレアナの発想であった。最初は誰もが驚いたものの、雷震波の生みの親でもあるメイザーが精霊力の共鳴と爆発的な破壊力増大の可能性を認めたことで、この作戦が成立したのだ。今、ニコレアナはいわば生きた雷力回路の核そのものとなって、究極の雷力の一撃を、敵に浴びせようとしていた。集まってくる紫と青の光……いつしか、彼女の身体までもが、同じ色の光を帯び始めていた。

やがてゼイリアが見守る中、ぱちりと一瞬、小部屋全体を覆うかのような光が

弾けた。それを合図とするかのように、それまで閉じられていたニコレアナの瞳が、見開かれる。

「姉さん……!」

ニコレアナは精一杯、魂を絞り出すようにしてゼイリアに声をかけた。ゼイリアはうなづき、振り返ると傍にいた少女に声をかける。

「ライカ! 機関部と前線に合図を!」

「は、はい!」

ライカが小部屋を走り出てからしばらくして、軽い振動が城砦を覆った。今、この砦そのものが雷力の飛空塞となつて、浮かび上がるうとしていなのだ。そして、その中央に据えられた小部屋の上には、巨大な魔魂石・ユーカリスの結晶と、それに接続されたサンダー・ブースターの発電部位が存在している。今、かすかな唸りを上げて、それらが起動し始めた。間もなく、ニコレアナはひときわ大きく目を見開くと、最後の術式を唱え終えた……。

※※※

その時、前線にいた兵たちは一斉にそれから距離を取り、空を駆ける飛兵たちも道を開けた。空中に浮かび上がった小城砦全体が、青と紫の入り混じった凄まじい光を放つ。その一瞬だけ、まるで戦場全体が照り輝いているようにすら見えた。間もなく砲門代わりのドーム状の丸屋根が開かれ、そこから巨大なユーカリスの結晶が、巨神の脳味噌のごとく露出する。次の瞬間……轟音とともにそこから雷の矢がほとばしった。いや、矢などという小さなものではない。まさに巨大な雷の柱とでもいうべきそれが、螺旋状にうねりながら、圧倒的な速度と力で戦場をなぎ払う。それは無数の壊嵐の眷属・狂飛竜を飲み込み、一直線にオグ・シグニスへと向かっていった。だがオグ・シグニスも、黙ってはいない。彼は大きく咆哮すると、一際大きな暴風を巻き起こし、風の障壁を作り出して身を守ろうとする。その直後、ぶつかり合った雷と風は混じりあい、大気を震わせつつ、激しい乱流と嵐の渦を周囲に巻き起こした。

一秒……二秒……息が詰まるような時間が続く。オグ・シグニスの身体を灼き尽くさんとする極大の雷震波と、それを防ごうとする邪悪な嵐の防壁。二つは押し合い、せめぎ合い、なかなか決着を見ない。

(ちっ……まづいな……!)

アイスラの雷の盾の陰で雷力術を駆使して戦いながら、その様子を見守っていたメイザーの唇から舌打ちが漏れる。一見、拮抗しているかのようにだった運命の天秤は、今、次第に傾きかけようとしていた。雷震波の直撃を防ぎながらもその衝撃をわずかずつ吸収し、オグ・シグニスの風が勢いを増し始めている。魔法の天才たるメイザーには、それがはつきりと分かった。その顔に焦りの色が浮かんだとき、ふと彼はアイスラの呟きを聞いた。

「あの嵐の障壁……私の、秘雷傘に似てる……」

「なるほど、そうか……!」

オグ・シグニスの持つ異形の力……それは偶然にも、アイスラの持つ秘雷傘に似た性質を持っていたのだ。だとすれば、それは時間が経てば経つほど、こちら

が劣勢になることを意味していた。ニコレアナが全精力で撃ち出し続ける雷震波には自ずと限界があるのに対して、オグ・シグニスのはうはその力の一部すら、自らのものとできるのだから……。

一瞬逡巡したあと、彼は意を決して、傍らの雷力の戦士たちに大声で告げる。

「おい、雷縛の魔法陣だ。一分……いや、数十秒でいい、時間を稼いでくれ。雷光の障壁で敵の目をくらまし、足止めするだけでいい！」

いぶかしがる彼らに向けて、メイザーは叫ぶ。

「いいから、早くしろ！」

さらに彼は、傍らのアイスラに向かって、何事かを囁いた。アイスラは、全てを悟ったかのようにうなづく。

やがて彼の命令が実行に移され、敵の攻勢が一瞬だけ弱まる。その隙に、彼は準備していた雷の精霊力を一気に高め、放出した。

「雷震波ッ！」

メイザー単独で放つそれは、この術の元祖たる彼のものだけに、相応の威力が

ある。そして……驚いたことに、アイスラも囁くようにして、同じ言葉を叫ぶ。たちまち、メイザーのものとは少し異なる色合いのそれが、秘雷傘から激しい音とともに撃ち放たれた。それはメイザーの放った雷の柱と合流し、うねりながら勢いを増した。だが、それだけではなかった。一瞬で彼らの意図を悟ったかのようになり、周囲の雷力師たちが、次々と雷力の術を打ち出していく。一本、二本……やがて、無数に。そして、それら全ての標的はオグ・シグニスではなく……城砦上部の、ユーカリスの巨大結晶に定められていた。

……雷震波の波長を調整すべく、苦悶の表情を浮かべていたニコレアナの元に、突如として暖かい光と熱がやってくる。今、城砦の中の小部屋にいるニコレアナは、不思議な感覚に囚われていた。ユーカリスの結晶に送り続けているはずの雷力が逆流したかのように、雷力師団の者たちの想いが伝わってきたのだ。それは、全てが同じ色と光と感触と温度を持っていた……大切な人を、家族を、仲間を、ゼフィロンを、護ろうとする心。

同時にそれは、色とりどりの風の形を有していた。幼い頃に駆け回った庭園を

吹き渡る優しいそよ風、愛する人を看取った夜に吹いていた冬の木枯らし、十年ぶりに戻った故郷に吹き降ろす山風、白冠草が咲く短い谷間の春風、黄金色の平原を吹き渡る悠久の風……いつしかニコレアナは苦痛を忘れ、微笑みさえ浮かべていた。そして彼女自身も最後の力を尽くして、再びその言葉を叫ぶ。ひととき強く、大きく。

「我が愛する故郷よ、永遠なれ（ゼフィロ・ネ・ス・ラナン）……!!」

ついに完成した、ゼフィロンの歴史の中でも究極最大の雷震波……後に、伝説として語り継がれることになるそれは、まるで大陸全土の闇を切り裂くように、オグ・シグニスの身体へと撃ち届けられた。

【了】